の注意をうながしてゐる、シカゴ大學中世史教授 Thompson 博士はこゝ數年來、Economic and Social History of the Middle Ages, Feudal Germany, The Middle Ages 等を續々公にして華々しき業績を擧げてゐり、殊に、Feudal Germany はアメリカに於ける歐洲中世史文獻としては近來の出來として推賞されてゐる事は勿論、ドイツ學界に於てもその價値を認めてゐるのである。

本書は Thompson 教授の最近の著作であつて、前著 Economic and Social History of the Middle Ages の續篇であり、前著と同じく The Century Historical Series の一書として出されたのである。したがつて、その目的とする所も前著と同じであり、前著の序文中の "In substance and form the book is the product of actual classroom teaching. Indeed, much of the material here presented has been worked out with my own students in seminar. It is hoped that the knowledge and experience so gained may be of service to the other teachers than myself and to the other classroom than mine" なる言葉はそのまゝ本書にも適用される。即ち、本書はその屬する叢書の性質上からも廣く一般的の敍述をなし、教師及び學生の參考に資せんとしたものである。

内容について見るに、全卷は二十二章に分たれ、個々の章はそれ自身獨立してゐる。そして取扱ふ國々は、ドイツ、フランス、イタリヤを始め、フランドル、スペイン、及び東歐ボヘミヤ、ポーランド等よりバルカン地方にまで及んでゐる。たゞ英國のみが除れてゐる事は、英國社會經濟史に關しては英語で書かれた多くの良書があり、且、紙數を制限されてゐるために割愛したのであつて、決して興味が少いためでない事を前著に述べてゐるが、この方針を本書に於ても取つたためと思はれる。而して取扱ふ問題の範圍も中世末期社會經濟史の重なる問題は大體取上げてをり法王の財政經濟政策についても述べてゐる事は、中世社會經濟史に於ける教會の意義を重視する著者の立場より出でたもので、かゝる考へは極めて妥當であると思ふ。なほ卷末に各章の問題に對する重要文獻をのせてゐる事は本書の利用價値を高めてゐる。

要するに、本書は決して組織的なものとは言へないが、中世末期社會經濟史の諸問題へのよき手引きであり且便利な本である。吾人はすでに中世末期社會經濟史に關しては多くの良書、良き論文を持つてゐたが、一般的な、入門書的なものゝ出現を望んでをつたのである。それ故本書の出版はかゝる希望を充すものとして歡迎される次第である。

(The Century Company. New York, 1931. 545 pages)

〔以上、鹽見〕、

◉獨逸史學史

文學博士　坂口　昂著

著者は生前既に世界に於ける希臘文明の潮流・概觀世界史潮を以て我西洋史學界に獨自の歩を進め、その逝去さるゝや門下

の諸士協力以てその遺稿の編纂に當り、ルネッサンス史概說、世界史論講の二書は既に世に出で我學界に大なる貢獻をなす所あるは人の知る所である。今や本書上梓さるゝに及び博士の名聲をして益々高からしめるものと言ふべきである。

本書は博士が生前京都帝國大學文學部史學科に於て四年間に亘つて連續講ぜられし所のものゝ編纂されしもの、講ぜられしは四年間とは云へ、完く博士生涯の研鑽、思索の結晶なりと言つても誤少き推察と信ずる。本書に於て、著者は、勿論そのタイトル自ら示す如く、獨逸に於ける歷史哲學の理論的展開を試みたるは言ふ迄もない、全篇四篇中の第一篇卽ちヘルデル、カント、フイヒテ及びヘーゲル等の歷史哲學を對象とせる所に特にその感を深くせしめるものがある。併し、ニーブール、ランケを取扱へる第二篇、ドロイゼン、ツイベルを顧みたる第三篇トライチケ、モムゼンを研究せる第四篇等に於ては、各歷史家の史學理論を究明せるは勿論なれど、そこにては、著者の研究對象は單に史學理論のみではなくして、却て其れ等の歷史家の全人格であると思はしめるのである。こゝに、第二篇以下に於て、第一篇に於ける理論的開展形式とは異なつた、ビオグラフィッシュな形式の見られる所以が存すると考へる。著者に於ては、歷史理論を知ると共に、否それ以上に、歷史家を知ることがより關心事ではなかつたか。本書を繙く者も亦この意味に於て讀まればならぬであらう。——未だ通讀すら敢てせざる紹介者の淺き理解の上のこれ等の言、或は著者の意に合せざる所あらんことを恐る。とまれ近來その類少き名著たるは言を俟たざる所、讀者の熟讀翫味して反省の一助とし、體驗內容の增大の資とされんことを望む〔菊版五五六頁、岩波書店發行、定價金參圓五拾錢〕（井上）

◉滿蒙合璧清內府一統輿地祕圖

奉天故宮所藏鈔圖四十一張影印、四拾五圓

◉乾隆十三排銅版中國圖

北平故宮博物館所藏鈔圖百四張玉版宣紙影印、百五拾圓

最近の靈文堂の册府に右の二つ、何れも故宮所藏の一統輿地祕圖の影印本が出版されたことを報告した、この兩圖は實に支那の地圖として今日までに出來たものゝ最優秀なもので、胡文忠の大淸一統輿圖は實にこれらの祕圖を原本として出來たものである、この種の輿圖が北京又は奉天の宮城にあることは餘程早く知られ、狩野・小川兩先生は之を明治年間に彼土で見られた、筆者が大正十三年九月北京に遊んだとき、小川敎授は是非これをさがしてこいと命ぜられたが、北京の圖書館、歷史博物館いづれを訪ねてもいつも無しと考へられた、そこで松浦嘉三郎君にゆつくりさがして貰ふことを托して歸朝したが、果してそれが奉天にもあれば、北平の故宮にもあつたのである。そこで滿洲の金梁氏がまづ前者を出版した、不幸にしてこの方は滿洲文字で記されてゐるところが多く、且つ枚數が少い、所が後